

四者協議会合同会議

9月14日と15日の2日間、平成29年度中国四国地区院長協議会、看護部長協議会、事務部長協議会、副学校長・教育主事協議会の四者協議会合同会議が丸亀市で開催されました。この合同会議は例年9月に開催されていますが4協議会共通のテーマとそれぞれの協議会の直面する個別テーマについて意見交換することが目的の会議で各施設の情報を得る貴重な機会となっています。

最も重要なのは共通テーマについての意見交換ですが今年のテーマは「経営～平成31年度黒字化を目指して」でこれは機構本部の目標にもなっております。国立病院機構は平成16年に独立行政法人化し、独立採算で経営をしてきておりますが、機構病院の施設の老朽化に伴う建て替え、医療機器の購入などが重なり経営状況が厳しくなっているようです。国立病院機構の運営は本部が各施設からの拠出金を管理し、私達の病院はそこから資金を借りて運営していますが、借入金の返済ができない病院が増えたため本部の資本が不足し経営難に陥っているとのこと。他人事のように、実は高知病院も借入金の返済が滞っている施設の一つです。高知病院、岡山医療センターは国時代に建築された最後の病院で多額の資本が投資されましたが、独立行政法人化に伴いその費用が各病院の負債となり返済義務が生じ現在に至っています。このような事情から高知病院は独立行政法人化に際し経営指導を受ける立場である再生プラン病院としてスタートしましたが、職員全てが危機感を持って経営努力を重ねてきた結果、独立行政法人化してから現在まで損益上単年度の黒字を続けてきています。しかしながら、高知病院の借入金の返済額は多額で本部の返済計画通りにはできておらず資金繰りは極めて厳しい状況です。単年度黒字であっても資金繰りが回らなければ黒字倒産と言われておりますが高知病院はまさに黒字倒産の病院です。先日の院長協議会で病院の評価は損益上の結果より資金繰りの状況で判断すべきとの意見がだされ本部の考え方も同じとのことで私達の病院は非常に厳しい立場に置かれた状況にあります。借入金の返済ができない病院は施設建て替えや医療機器の整備に対する投資が困難となるという見解が出されましたが私達の病院はこれに当てはまります。良質な医療の実践には医療機器の整備なくしては困難であることは自明のことですが機構本部がそれほど厳しい状況であることの裏返しでもあります。高知病院は残念ながら今はキャッシュの回らない病院ですが、もう少しだけ成績を上げることでこの環境から脱却することが可能となるまでできています。そのためには病院職員が心一つとして経営改善策を断行し資金繰りをよくする以外に方法はありません。

今、私達に必要なことは意識改革で、赤字を続けていても最後は国や機構がなんとかしてくれるという従来の考え方を捨て去ることが第一歩ではないかと考えます。機構はなくなりませんが機構病院の中でもなくなる病院は近いうちにでてくるかもしれません。しかし、なくなって困るのはその病院で働いている職員です。高知病院にとってここ数年が最も重要な時期と考えますが皆さんと力を合わせてこの難局を乗り切っていきたいと思っています。